

〔発言者〕 栗原貞子

〔発言年月日〕 1972年5月

〔生年、被爆地、職業など〕 1913年生まれ。広島で被爆。詩人。

〔内容〕

<ヒロシマ>というとき
<ああヒロシマ>と
やさしくこたえてくれるだろうか
<ヒロシマ>といえば<パール・ハーバー>
<ヒロシマ>といえば<南京虐殺>
<ヒロシマ>といえば 女や子供を
壕のなかにとじこめ
ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑
<ヒロシマ>といえば
血と炎のこだまが 返って来るのだ

<ヒロシマ>といえば
<ああ ヒロシマ>とやさしくは
返ってこない
アジアの国々の死者たちや無告の民が
いっせいに犯されたものの怒りを
噴き出すのだ
<ヒロシマ>といえば
<ああ ヒロシマ>と
やさしくかえってくるためには
捨てた筈の武器を ほんとうに
捨てねばならない
異国の基地を徹去せねばならない
その日までヒロシマは
残酷と不信のいがい都市だ
私たちは潜在する放射能に
灼かれるバリアだ

<ヒロシマ>といえば
<ああ ヒロシマ>と
やさしいこたえがかえって来るためには
わたしたちは
わたしたちの汚れた手を
きよめねばならない (七二、五)

〔注〕

原爆被害者もまた加害者の側面があることを見つめざるを得ないベトナム戦争期の被爆者の鋭い感性の言葉として、大きな影響をあたえた。掲載したものは 32 行の詩の全文である。栗原貞子詩集「ヒロシマ・未来風景」(栗原貞子著、詩集刊行の会、1974年3月30日)に拠る。「徹去」は原文のままとした。

(『ヒロシマというとき』栗原貞子、三一書房、1976年などに所収)